複合動詞「V-スギル」の特性について

九州大学文学部人文学科
言語学・応用言語学専攻
平成 14 年入学
1 LT02038G　亀川　裕子
平成 18 年 1 月提出

要旨

「動詞連用形+スギル」という形式の複合動詞は、付帯状況を示す「-テ」が後続する場合、その「V-スギル」が肯定形であるか否定形であるかによって、容認性に違いが表れる。また、付帯状況を示す「-テ」を含む文の主動詞として用いた場合にも容認性は変化する。そこから、付帯状況を示す「-テ」の構文をとる場合の「V-スギル」は文中に置くことができないことを主張する。

また、「待ち合わせ場所に早く着きすぎた」という文では、構造的には「-スギル」が動詞にかかっているにもかかわらず、意味的には形容詞にかかっている。このような、構造と意味に食い違いがある例に注目し、どういう条件が満たされた場合に、こういう現象が見られるのかを分析した。結果、この文型で構造と意味に食い違いがないものには「～のが-スギル」と「～には-スギル」の 2 種類があり、「-スギル」を動詞にかかるよう文末に移動できるのは「～のが-スギル」の文型のみであるということを明らかにした。

目次

0. はじめに ---------- 1

1. 「-スギル」 ---------- 1

2. 位置と形—否定と肯定 ---------- 2

2.1. 「-テ」を含む複文 ---------- 2

2.1.1. 「-テ」の意味役割 ---------- *2*

2.1.2. 原因・理由を表す「-テ」 ---------- *3*

2.1.3. 継起・並列を表す「-テ」 ---------- *3*

2.1.4. 付帯状況を表す「-テ」 ---------- *3*

2.2. 「スギル/スギナイ」の違い ---------- 4

2.3. 位置による違い ---------- 5

2.4. 分析・考察 ---------- 6

3. 「形容詞連用形+V-スギル」 ---------- 7

3.1. 「形容詞連用形+V-スギル」について ---------- 7

3.2. 「のが」と「には」 ---------- 8

3.2.1. 「のが」文型 ---------- *8*

3.2.2. 「には」文型 ---------- *9*

3.2.3. 「には」文型の過去形 ---------- *11*

3.2.4. 分析・考察 ---------- *13*

3.3. スピードとタイミング ---------- 13

3.3.1. スピードが{速い/遅い} ---------- *13*

3.3.2. タイミングが{早い/遅い} ---------- *14*

3.3.3. 「遅い」と「ゆっくり」 ---------- *15*

3.3.4. 分析・考察 ---------- *15*

3.4. 対になる形容詞 ---------- 16

3.4.1. 他の形容詞 ---------- *16*

3.4.2. 分析・考察 ---------- *18*

4. まとめ ---------- 19

参考文献 ---------- 20

0. はじめに

複合動詞とは、「取り-あげる」「書き-終わる」などのような複数の動詞が組み合わさってできている動詞のことである。本論文の目的は、「食べ-すぎる」「読み-すぎる」などの複合動詞を成す「-スギル」に注目し、その特性についての考察を深めることである。複合動詞を成す動詞は先にあげた「-アゲル」「-オワル」の他にも多く存在するが、その中で「-スギル」を対象に選んだのは、本文でも登場する(1)の例文がきっかけとなった。

(1) ??日本人は力を入れすぎて歯を磨いている。

(1)は、文章の意味は理解できるが、違和感が残る。この違和感の原因が「-アゲル」「-オワル」とは違う「-スギル」の特性にあるものとし、本論文では特にその位置と形に焦点を当てながらその特性を分析していく。

第 1 章で「-スギル」の意味を確認した後、第 2 章では「-スギル」の形や位置を変えながら、文章の容認性の違いを比較している。そして第 3 章では「待ち合わせ場所に早く着きすぎた」のような文に代表される、本来形容詞を修飾するべき「-スギル」が動詞にかかっている文型に注目し、それを分析することによって、別の観点から「-スギル」の特性を探っている。

1. 「-スギル」

「-スギル」は他の動詞や形容詞・形容動詞の語幹、副詞につく接尾辞である。もともと「スギル」という動詞が“ 価値的に一般標準をはるかに上回る ”という意味を持つことから、その先行語の動作や状態が“ 過度 ”であるという意を添えるようになった。森田良行(1933)によると、「-スギル」は全部で 4 つの状態を表すことができる。

(2) その勇者は敵を恐がりすぎる。（極端に…する）〔瞬間的動作〕
(3) いくら疲れているからって寝すぎだよ。（極端に…する）〔継続的動作〕
(4) 彼はタバコを吸いすぎる。（たくさん…する）
(5) 君は彼女にちょっと言いすぎるよ。（不適当なくらい…する）

「-スギル」が自動詞についた場合は、(2)(3)の意味のみを生じ、他動詞についた場合はそれに加えて(4)(5)の意味も生じる。また、先行語が状態性の動詞ではなく、(3)(4)(5)のような動作性の動詞であった場合でも、「-スギル」と複合動詞をなすことによって“ その動作が過度の状態にある ”という状態性の表現となる。

2. 位置と形―否定と肯定

2.1. 「-テ」を含む複文

本章では「-スギル」の位置や形によって文の容認性に差が出てくることを述べていく。ここでは特に、その容認性に差が出やすいことに注目し、「-テ」含む文の主動詞に当てはめて考える。はじめに様々に解釈される「-テ」の意味役割を確認してから、「-スギル」の位置や形によって変化する容認性を示していく。

2.1.1. 「-テ」の意味役割

従属節に表された動作や出来事（前件）を P、主節に表された動作や出来事（後件）を Q で示したとき、「-テ形」は「P て Q」という文型であり、P と Q の述語の種類や内容によって、P の意味は様々に解釈される。(白川博之(2002))

実際にこの文型に当てはめたもので、それぞれのＰの意味が異なっている例文を集めてみた。

(6)　　酔拳の使い手はお酒を飲んで家に帰った。（継起）
(7)　　酔拳の使い手はお酒を飲んでご飯も食べた。（並列）
(8)　　酔拳の使い手はお酒を飲んで酔っ払った。（原因・理由）
(9)　　酔拳の使い手はお酒を飲んで敵をやっつけた。（付帯状況）

(6)～(9)の例はすべて「-テ」を含む文型だが、それぞれに現れている要素は異なっている。それぞれＰ（従属節に表された動作や出来事）の部分は、(6)動作や出来事の継起、(7)並列、(8)原因・理由、(9)ある動作に他の動作か動作の結果の状態が伴う付帯状況を表している。

一見、文章はどれも同じく自由に「-テ」の構文をとることができそうだが、P の述語動詞を「動詞連用形+スギル」の形に当てはめてみると、必ずしも同じようには使えなくなってしまう。

(6)'　　??酔拳の使い手はお酒を飲みすぎて家に帰った。（継起）
(7)'　　??酔拳の使い手はお酒を飲みすぎてご飯も食べた。（並列）
(8)'　　酔拳の使い手はお酒を飲みすぎて酔っ払った。（原因・理由）
(9)'　　??酔拳の使い手はお酒を飲みすぎて敵をやっつけた。（付帯状況）

以下、これを踏まえて意味役割における容認性の違いについて考察していく。本論文では、一見して意味が分かるかどうかを容認性の高低の基準としている。受け取る側が

頭の中で想像を働かせて、理解しようと努めた結果理解できるものに関しては、容認性が低いと判断する。

2.1.2. 原因・理由を表す「-テ」

(8)'原因・理由を表す「-テ」は、問題なく「-スギル」の文型に当てはめることが可能である。これは他の例をあげて考えてみても明らかである。(a)がもとの文、(b)が「V-スギル」に言い換えた文である。

(10)　a.　花子は緊張しておなかが痛くなった。
　　b.　花子は緊張しすぎておなかが痛くなった。

(11)　a.　一郎はテレビゲームに熱中して徹夜してしまった。
　　b.　一郎はテレビゲームに熱中しすぎて徹夜してしまった。

「-スギル」が挿入されることによって、(8)「飲む」が「飲みすぎる」、(10)「緊張する」が「緊張しすぎる」、(11)「熱中する」が「熱中しすぎる」のように、述語の直接の原因となる動詞の程度が甚だしくなる。しかしそれによって、P と Q の因果関係が変わるわけではないので、文章の意味には全く影響しないのである。つまり、言い換えによって容認性が低くなる可能性はきわめて低いといえる。よって、「-スギル」の特性を分析するために、原因・理由を示す「-テ」についてのこれ以上の考察は必要ないと判断する。

2.1.3. 継起・並列を表す「-テ」

原因・理由を表す「-テ」が問題なく「-スギル」の文型をとれると言えるのに対し、(6)'継起(7)'並列を表す「-テ」はどうだろうか。

(6)'継起は文章としては問題なさそうだが、「飲みすぎて、それから家に帰った」というもとの「動作や出来事の継起」の意味であるというよりも、「飲みすぎた状態で家に帰った」という「付帯状況」にすり替わっていると考えるほうが自然である。よって(6)'は(6)の正確な言い換えであるとは言えない。そして、(7)'並列にも違和感が残る。(7)'は「飲みすぎて、さらに食べた」と受け取れるが、並列するものの程度が揃っていないため、不自然である。

2.1.4. 付帯状況を表す「-テ」

最後に(9)'付帯状況を表す「-テ」について考える。(9)'付帯状況は「～な状態のまま」という意味なので「飲みすぎた状態のまま敵をやっつけた」という意味であると解釈はできるものの、実際に文章にしてみると落ち着きが悪く感じる。(6)'はもともと継起を

表していた「-テ」を付帯状況の意味でとらえるならば容認できた。では、もともと付帯状況を表していた「-テ」を「V-スギル」の文型に当てはめた場合に容認性が低くなるのはなぜだろうか。そこで、原因・理由を表す「-テ」と同様、他の例文を使って考えてみることにする。

(12) a. 花子は緊張して舞台に臨んだ。
b. ??花子は緊張しすぎて舞台に臨んだ。

(13) a. 太郎は力を入れて歯を磨く。
b. ??太郎は力を入れすぎて歯を磨く。

原因・理由を表す「-テ」の場合はまったく問題がなかった「-スギル」の挿入も、付帯状況を表す「-テ」となると、容認性は低くなる。(12b)は、花子は誰が見ても緊張していると分かるような状態で舞台に臨んだ、という意味であると受け取れる。同様に(13b)も、太郎は力を入れすぎた状態で歯を磨く、という意味であると受け取れる。しかし「緊張しすぎて舞台に臨んだ」や「力を入れすぎて歯を磨く」というような表現には馴染みがなく、一見しただけで意味が分かるとは言えない。よってここでは、はじめに提示した条件により容認性が低いと判断できる。

以上を踏まえ本論文では、「動詞連用形+スギル」という形式の複合動詞について、特に容認性に差が現れやすい付帯状況を示す「-テ」が後続する場合を対象にしてその条件や特性を探っていく。

2.2. 「スギル/スギナイ」の違い

ここでは文中の「-スギル」が肯定形であるか否定形であるかによって、その容認性に差があることを見ていく。(a)が肯定形の場合、(b)が否定形の場合である。

(14) a. ??花子は緊張しすぎて舞台に臨んだ。
b. 花子は緊張しすぎないで舞台に臨んだ。

(15) a. ??太郎は力を入れすぎて歯を磨く。
b. 太郎は力を入れすぎないで歯を磨く。

(14)(15)どちらの場合も(a)より(b)のほうが、容認性が高くなったと言える。これは肯定形と否定形の文章を比較した場合の容認性の差を示したものであり、文章の絶対的な正しさを示すものではないが、肯定形の場合に比べ、否定形の場合のほうが容認性は高くなる。これは「～しすぎない状態で-する」という言葉の意味が原因だと考えられる。「-スギル」ことは度が過ぎることを示し、そもそもあまりいい意味で用いられることはない。つまり逆に「-スギナイ」ことはちょうどよいという意味であり、(14b)(15b)はどちらも、ほどよい状態で動作を行うという意味になる。

(14a)' 花子は緊張しすぎて舞台に臨んだので、失敗してしまった。
(15a)' 太郎は力を入れすぎて歯を磨くので、歯茎を痛めてしまった。

つまり、(14a)'(15a)'のように補う文があれば容認性はあがるが、それがない場合は理解がしにくくなってしまうのだ。

また、(14b)と(15b)を比べたときに、(14b)の方がより自然であると感じるように、複合動詞を成す動詞やそのシチュエーションによっても文章の容認性は変化すると考えられる。(15b)の場合は、力を入れて歯を磨くことが一般的によくないことであるという前提がなければ、文章自体の容認性が低くなってしまうからだ。つまり同じ否定形であっても、一様に容認性が高いとは言えないということだ。

2.3. 位置による違い

また複合動詞「動詞連用形+スギル」は、文中における位置によってもその容認性は変化する。そしてここでも、肯定形であるか否定形であるかによって、容認性に差が表れる。「-スギル」の位置が(a)は文中にある場合で、(b)が文末にある場合である。

(16) a. ??花子は緊張しすぎて舞台に臨んだ。
b. 花子は舞台に臨むとき緊張しすぎていた。

(17) a. 花子は緊張しすぎないで舞台に臨んだ。
b. ??花子は舞台に臨むとき緊張しすぎないでいた。

(16a)のように違和感のあったものでも、語順を入れ替えて複合動詞を述語の位置に移動させれば容認性は高くなる。逆に(17a)のように、肯定形に比べて容認性の高かった否定形の複合動詞を述語の位置に移動させると、容認性が低くなることが分かる。

ここでは肯定形と否定形で、位置による容認度は正反対になることが分かった。しかしこれは言い回しの問題であり、複合動詞を述語の位置に移動させた場合の、語尾が「～しすぎている」という表現には問題ないが、「～しすぎないでいる」という言い方はあまりしないことに原因があるといえる。特に(17b)は「花子は舞台に臨むとき緊張しすぎていなかった」とすればそれほど違和感がないことが分かる。

2.4. 分析・考察

複合動詞「V-スギル」は、文中での位置や形によって容認性が異なると仮定し、分析していった。特にその差が表れやすい付帯状況を示す「-テ」の構文をとる場合について考えたとき、以下のようなことが分かった。

文中における「V-スギル」の形という点から見た場合、複合動詞を成す動詞やシチュエーションによって容認性は変わってくるが、主に否定形の場合に容認性は高く、肯定形の場合に容認性は低いといえる。これは、「V-スギナイ」という表現が「度が過ぎないほどよい状態である」という意味になるためであり、肯定形の場合は、後に「-スギル」ことが不自然でなくなるようフォローする文章を付け加えなければ、文中に「-テ形」で「-スギル」を使用することは難しい。

文中における「V-スギル」の位置という点から見た場合については、位置だけで容認性が決まるわけではなさそうだということが分かった。肯定形の場合、「-スギル」が文中にあるときは容認性が低かったものが、文末に移動すると容認性が高くなるのに対し、否定形の場合、「-スギナイ」が文中にあるときは容認性が高かったものが、文末に移動すると容認性が低くなる。しかしこれは、あくまでも「-テ形」にこだわったときのみにおいていえることであり、より自然な言い方に変化させることによって、文末に「-スギル」がくるものについては容認できるようになる。

よってここでは、「-スギル」は「-テ形」の文型で文中に置かれたときのみ容認性が低くなるとまとめられる。

3. 「形容詞連用形+V-スギル」

3.1. 「形容詞連用形+V-スギル」について

ここまでは「動詞連用形+スギル」という形式についてのみ考えていた。しかし本章では、構造的には「-スギル」が動詞にかかっているにもかかわらず、意味的には形容詞にかかっているという、構造と意味に食い違いがある文型をもとに「-スギル」の特性を分析していく。

(18) a. 待ち合わせ場所に着くのが早すぎた。
b. 待ち合わせ場所に早く着きすぎた。

(19) a. 昨日は寝るのが早すぎた。
b. 昨日は早く寝すぎた。

(20) a. 彼女は音楽を聴く音が大きすぎる。
b. 彼女は音楽を大きな音で聴きすぎる。

どれもよく使われる表現であるが、(18a)(19a)(20a)は「-スギル」が形容詞にかかっているのに対し、(18b)(19b)(20b)は「-スギル」が動詞にかかっている。しかし(18b)(19b)(20b)の「-スギル」はどれも、意味的には動詞ではなく形容詞の部分にかかっている。(18)を例にとっていうと「-スギタ」のは「待ち合わせ場所に着いた時間の早さ」であり、「着く」という行為ではないからだ。

(20)の例文については「形容詞連用形+V-スギル」の文型ではないので、本章で考えていくものとは異なるが、構造としては同じであり、かつ分かりやすい表現なので提示することにした。そしてまた、これと似た表現であるが「形容詞連用形+V-スギル」の文型に当てはめると容認性が低くなるというものもあるので以下に示す。

(21) a. あの人は、死ぬには若すぎた。
b. ??あの人は、若く死にすぎた。

(22) a. 10 人で 6 人部屋だなんて入るには狭すぎた。
b. ??10 人で 6 人部屋だなんて狭く入りすぎた。

(23) a. この映画は映画館で観るには高すぎた。
b. ??この映画は映画館で高く観すぎた。

これらの違いはいったいどこにあるのだろう。本章では、どういった条件でこの「早く着きすぎる」のような表現が容認可能になるのかを、様々な例文をもとに分析していく。

3.2. 「のが」と「には」

(18)～(23)を比べて気付くのは、「～するのが-スギル」という文型と「～するには-スギル」という文型で区別ができるということである。（以下、それぞれ「のが」文型と「には」文型と呼ぶ）ここまでの例文を見た限りでは「のが」文型の場合は「形容詞連用形+V-スギル」に言い換えても容認性は高く、「には」文型の場合は「形容詞連用形+V-スギル」に言い換えたとき容認性が低くなると考えられるが、それは正しいのだろうか。以下、「のが」文型と「には」文型とで、言い換えたときの容認性に違いがあるのかを考えていく。

3.2.1. 「のが」文型

まずは「のが」文型について考えていく。いずれの場合も a.が「～するのが-スギル」、b.が「形容詞連用形+V-スギル」という形である。

(24) a. 時間が経つのが早すぎる。
　　 b. 時間が早く経ちすぎる

(25) a. 時間が流れるのが早すぎる。
　　 b. 時間が早く流れすぎる。

(26) a. 彼女は結婚するのが早すぎだ。
　　 b. 彼女は早く結婚しすぎだ。

(27) a. あの人は字を書くのが雑すぎる。
　　 b. あの人は字を雑に書きすぎる。

(28) a. ひとつひとつの作業をするのが丁寧すぎる。
　　 b. ひとつひとつの作業を丁寧にしすぎる。

(29) a. 色を塗るのが汚すぎる。
　　 b. 色を汚く塗りすぎる。

(30) a. あの人は死ぬのが早すぎた。

　　 b. あの人は早く死にすぎた。

それぞれ程度の差はあれど、どの例文でも言い換え前と言い換え後の容認性が大きく異なるものはない。しかし例外もある。

(31) a. ??あの店は商品を売るのが高すぎる。
　　 b. あの店は商品を高く売りすぎる。

これは他のパターンと違い、言い換え前は容認できなかったけれど言い換え後は容認できるという特殊な形である。他の例文はそれぞれの行為自体が「早」かったり「雑」だったりするのに対し、(31)の場合は「高い」のは「商品」であり、「売る」行為自体が高いわけではないので、「売るのが高すぎる」とは言えないのだ。つまり、形容詞が意味的に動詞を直接修飾しているものでなければ、「形容詞連用形+V-スギル」への言い換えは不可能であると考えられる。(31)と同じようなパターンの他の例としては、(32)のような文章があげられる。

(32) 高級な食材を安く食べることができたというシチュエーションで
　　 a. ??今日のマツタケは食べるのが安すぎた。
　　 b. ??今日のマツタケは安く食べすぎた。

(32)を見ても分かるように、このような文型で(b)を容認できるのは(31)のような特殊な例のみであるといえる。つまり、(31)の例外を除けば、「のが」文型の場合は言い換えても容認できるものばかりだと言えそうだ。

3.2.2. 「には」文型

次に「には」文型について考える。こちらも「のが」文型同様、いずれの場合も a が「～するには-スギル」、b が「形容詞連用形+V-スギル」という形である。

(33) a. この桃を食べるには早すぎる。
　　 b. ??この桃を早く食べすぎる。

(34) a. 今のタイミングじゃ、飛ぶには早すぎる。
　　 b. ??今のタイミングじゃ、早く飛びすぎる。

(35) a. 彼女は結婚するには早すぎる。
　　 b. ??彼女は早く結婚しすぎる。

(36) a. 出会ったばかりだし、告白するには早すぎる。
b. ??出会ったばかりだし、早く告白しすぎる。

(37) a. （まだ 8 時だ。）寝るには早すぎる。
b. ??（まだ 8 時だ。）早く寝すぎる。

(38) a. あの人は死ぬには若すぎる。
b. ??あの人は若く死にすぎる。

(39) a. 謝るには遅すぎる。
b. ??遅く謝りすぎる。

(40) a. （もう夜の 11 時だ。）ご飯を食べるには遅すぎる。
b. ??（もう夜の 11 時だ。）ご飯を遅く食べすぎる。

(41) a. このケーキは食べるには甘すぎる。
b. ??このケーキは甘く食べすぎる。

(42) a. このコーヒーは子供が飲むには苦すぎる。
b. ??このコーヒーは子供が苦く飲みすぎる。

(43) a. 今日は外で遊ぶには暑すぎる。
b. ??今日は外で暑く遊びすぎる。

(44) a. あのお風呂のお湯は入るには熱すぎる。
b. ??あのお風呂のお湯は熱く入りすぎる。

(45) a. この荷物は運ぶには重すぎる。
b. ??この荷物は重く運びすぎる。

(46) a. この靴は買うには高すぎる。
b. ??この靴は高く買いすぎる。

ここまで見て分かるのは、「には」文型の場合は、「のが」文型の場合とは対照的に言い換え後は容認性が低くなるものばかりであるということだ。「には」文型は、「～をしようと思ったら」と言い換えることができ、例えば(33a)「この桃を食べるには早すぎる」をあげると、「桃を食べようと思ったら時期が早すぎるので、まだ食べられない」あるいは「食べてはいけない」というように、結果として、その行為がまだ行われていない可能性が高い表現だといえる。そしてこれを「形容詞連用形+V-スギル」の文型に言い換えると、(33b)「この桃を早く食べすぎる」となり、意味としては、行為者はこの桃を毎年早すぎる時期に誤って食べてしまうというような、「恒常的に～V-スギル」という意味を含む文になってしまうのである。よって、「には」文型の言い換えにはならないといえる。

3.2.3. 「には」文型の過去形

ここで、(33)～(46)を「～するには-スギタ」と過去形に言い換えてみることにする。すると文章は「～をしようと思って実際にしてみたが、それは-スギタ」という意味になり、3.2.2 で示したような誤差が生じにくくなると考えられる。そこで、さきほどの例文(33)～(46)を過去形に言い換えて(c,d)とし、もう一度比較してみる。

(33) c. この桃は食べるには早すぎた。
d. この桃は早く食べすぎた。

(34) c. 今のタイミングじゃ、飛ぶには早すぎた。
d. 今のタイミングじゃ、早く飛びすぎた。

(35) c. 彼女は結婚するには早すぎた。
d. 彼女は早く結婚しすぎた。

(36) c. 出会ったばかりだったし、告白するには早すぎた。
d. 出会ったばかりだったし、早く告白しすぎた。

(37) c. まだ 8 時だったなんて、寝るには早すぎた。
d. まだ 8 時だったなんて、早く寝すぎた。

(38) c. あの人は死ぬには若すぎた。
d. ??あの人は若く死にすぎた。

(39) c. 謝るには遅すぎた。
d. ??遅く謝りすぎた。

(40) c. 昨夜帰ったら 11 時で、ご飯を食べるには遅すぎた。
d. ??昨夜帰ったら 11 時で、ご飯を遅く食べすぎた。

(41) c. このケーキは食べるには甘すぎた。
d. ??このケーキは甘く食べすぎた。

(42) c. このコーヒーは子供が飲むには苦すぎた。
d. ??このコーヒーは子供が苦く飲みすぎた。

(43) c. 今日は外で遊ぶには暑すぎた。
d. ??今日は外で暑く遊びすぎた。

(44) c. あのお風呂のお湯は入るには熱すぎた。
d. ??あのお風呂のお湯は熱く入りすぎた。

(45) c. この荷物は運ぶには重すぎた。
d. ??この荷物は重く運びすぎた。

(46) c. この靴は買うには高すぎた。
d. !!この靴は高く買いすぎた。

容認性の違いを分かりやすくするために、ここでは(33)〜(37)すぐに容認性が高いと判断できるもの、(38)〜(40)は容認性の判断に迷いが生じるもの、(41)〜(45)はすぐに容認性が低いと判断できるもの、というように分類してある。(46)はどこにも属さない特殊な例である。

こうして比較してみると、容認性が高いものは確かに増えたと言える。しかし、容認性が高いと判断できた(33)〜(37)の例を見ると、「〜をしようと思って実際にしてみたが、それは-スギタ」という意味になっているが、それは結果的に「〜をするのが-スギタ」という「のが」文型の言い換えにすぎないことに気付く。つまり(33)〜(37)は「には」文型の言い換えとしてではなく、「のが」文型の言い換えとして容認できた可能性が高いのである。(41)〜(45)の例が容認できないのも、「のが」文型では決して言い表せないからだと考えれば自然である。となると、「には」文型の場合は、言い換えは全ての場合において不可能であると考えられる。

そして特殊な例としてあげた(46)は、(c,d)ともに容認できるが、一見したときの意味が異なっていて正確な言い換えになっていないため、「!!」の印を付けて区別した。(46c)は(41)〜(45)の例と同様「のが」文型では決して言い表せないものであり、「買おうと思ったら高すぎたので買えない」あるいは「買わない」という意味を含むものである。しかし(46d)は「実際に買ったが高すぎた」という意味になり、「のが」文型のときに特殊な例であげた(31)と全く同じ例であったといえる。

3.2.4. 分析・考察

「のが」文型は全ての場合において言い換えが可能であるといえる。一方、「には」文型は全ての場合において言い換えが不可能であるといえる。

「〜するのが-スギル」はどの文においても「〜する」という行為自体が「-スギル」という意味であるため「形容詞連用形+V-スギル」の形に言い換えても容認性は高くなる。それに対し「〜するには-スギル」の場合、行為自体と「-スギル」の直接関係がないものも多いため、そういったものは全て言い換えたときの容認性が低くなってしまうのだ。「には」文型が言い換え可能になる場合は、行為自体と「-スギル」の直接関係があり、「〜をしようと思って実際にしてみたが、それをするのが-スギタ」という意味になることから考えて、「のが」文型の言い換えとなっているとみるのが自然である。

(31b)「あの店は商品を高く売りすぎる」、(46d)「この靴は高く買いすぎた」のような例もあるが、特殊なのでこれらの分析には当てはまらない。

3.3. スピードとタイミング

「形容詞連用形+V-スギル」の文型に当てはまる例文を作ると、自然と「早く-スギル」という形の例文が多くなった。これは、動作自体のタイミングやスピードに「早い」「遅い」が存在するからであると考えられる。ここでは「早い」と合わせて、対になる「遅い」についても同時に見ていきながら、その容認性の違いを比べる。ちなみに、ここであげる例文は全て「〜するのが-{早すぎる/遅すぎる}」の形で表してある。また、より分かりやすいように、動作のスピードが{速い/遅い}ものと、動作をするタイミングが{早い/遅い}ものとに分けて考える。

3.3.1. スピードが{速い/遅い}

(47) a. 太郎は食べるのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. 太郎は{早く/??遅く}食べすぎる。

(48) a. 花子は歩くのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. 花子は{早く/??遅く}歩きすぎた。

(49) a. 彼女はお酒を飲むのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. 彼女はお酒を{早く/??遅く}飲みすぎた。

(50) a. あの自動車は進むのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. あの自動車は{早く/??遅く}進みすぎる。

3.3.2. タイミングが{早い/遅い}

(51) a. 予定を決めるのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. 予定を{早く/??遅く}決めすぎる。

(52) a. 待ち合わせ場所に着くのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. 待ち合わせ場所に{早く/遅く}着きすぎる。

(53) a. 約束の場所に来るのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. 約束の場所に{早く/遅く}来すぎた。

(54) a. 課題を提出するのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. 課題を{早く/遅く}提出しすぎた。

(55) a. あの人は死ぬのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. あの人は{早く/??遅く}死にすぎた。

(56) a. あの赤ん坊は生まれるのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. あの赤ん坊は{早く/??遅く}生まれすぎた。

(57) a. 誕生日を祝うのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. 誕生日を{早く/??遅く}祝いすぎた。

(58) a. いつも学校に行くのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. いつも学校に{早く/遅く}行きすぎる。

(59) a. 家を出るのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. 家を{早く/遅く}出すぎる。

(60) a. 帰ってからテレビをつけるのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. 帰ってからテレビを{早く/??遅く}つけすぎる。

(61) a. 秘密のパーティーについて彼に言うのが{早すぎる/遅すぎる}。
b. 秘密のパーティーについて彼に{早く/??遅く}言いすぎる。

(62) a. 返事するのが{早すぎた/遅すぎた}。
b. {早く/??遅く}返事しすぎた。

3.3.3. 「遅い」と「ゆっくり」

言い換え前は全て容認可能だが、言い換えると「遅い」は言えなくなるものもあることに気付く。「早い」に比べて「遅い」の容認性が低くなるのは、第 2 章での(39)(40)の例でも同様のことが言えるため、「早く-スギル」は比較的容認できる幅が広いのに対し、「遅く-スギル」はその幅が狭いのではないかと予想すれば辻褄が合う。

また、「遅い」という言葉は相対的な速度の小ささには使えるが、絶対的な速度の小ささには使えない。絶対的な速度の小ささをあらわすときには「ゆっくり」という言葉を使うのが適切である。そこで「動作のスピードが{速い/遅い}」と分類した例文に、ゆっくりという言葉を使ってみる。

(47) c. 太郎は食べるのが{早すぎる/ゆっくりすぎる}。
d. 太郎は{早く/ゆっくり}食べすぎる。

(48) c. 花子は歩くのが{早すぎた/ゆっくりすぎた}。
d. 花子は{早く/ゆっくり}歩きすぎた。

(49) c. 彼女はお酒を飲むのが{早すぎる/ゆっくりすぎる}。
d. 彼女はお酒を{早く/ゆっくり}飲みすぎた。

(50) c. あの自動車は進むのが{早すぎる/ゆっくりすぎる}。
d. あの自動車は{早く/ゆっくり}進みすぎる。

このように「遅い」を「ゆっくり」と言い換えると容認性が低かったものも、その容認性が高くなることが分かる。また、「タイミングが{早い/遅い}」と分類していたものでも、(51b)「??予定を遅く決めすぎる」も「遅い」を「ゆっくり」と言い換え、「予定をゆっくり決めすぎる」とすると容認性が上がる例もある。

3.3.4. 分析・考察

多くの例文を作ろうとしたときに、「早すぎる/遅すぎる」が一番多く作ることができたのは、「長い/短い」や「高い/低い」などでは、そこに伴う動作もある程度限定さ

れてしまうのに対し、「早い/遅い」はその動作のタイミングやスピードを表すことに使えるため、伴う動詞を限定することなく使用できるからである。

また、「遅い」では容認性が低いものも、絶対的な速度の小ささをあらわすときに使える「ゆっくり」を使えば容認性が高くなる。

3.4. 対になる形容詞

3.4.1. 他の形容詞

ここでは前節の結果を踏まえて、他の対になる形容詞でも同じように容認性に偏りがあるのか調べる。

「形容詞連用形＋V-スギル」の形で例文を挙げていく。ここでは言い換え前の形は省略する。また、「には」文型の例文を使うと、どの形容詞の場合でも言い換え後の容認性が低くなる可能性が高いため、ここでの基本文は「のが」文型のみで考えていく。

{高い/低い}

(63) a. あの少年は凧を{高く/??低く}揚げすぎる。
b. 鷹が{高く/低く}飛びすぎる。
c. この跳び箱を{成功/失敗}するなんて、あいつは{高く/??低く}跳びすぎる。
d. あの子は理想を{高く/低く}持ちすぎる。
e. 両親同様、私は背が{高く/??低く}成長しすぎた。
f. ゲームでレベルを{高く/低く}設定しすぎる。

{多い/少ない}

(64) a. この予算では{多く/少なく}見積もりすぎた。
b. ハロウィンのお菓子を{多く/??少なく}もらいすぎた。
c. バーゲンセール{だったので/たったのに}、{多く/??少なく}買いすぎた。
d. お店の人に注文を{多く/??少なく}つけすぎた。
e. 日焼け止めを{多く/??少なく}塗りすぎた。
f. 荷物を{多く/??少なく}持ちすぎた。

{大きい/小さい}

(65) a. 返事をするとき、声を{大きく/??小さく}出しすぎた。
b. 大根を{大きく/小さく}切りすぎた。
c. ノートに字を{大きく/小さく}書きすぎた。
d. 好きなアーティストのライブで{大きく/??小さく}揺れすぎた。

{深い/浅い}

(66) a. ダイビングで{深く/??浅く}潜りすぎた。
b. あの鯨は{深く/浅く}泳ぎすぎたのだろう。
c. 沼に{深く/??浅く}はまりすぎた。
d. 思い出したくない出来事を{深く/??浅く}沈めすぎた。

{濃い/薄い}

(67) a. この料理は、{濃く/??薄く}味付けすぎだ。
b. 原稿を{濃く/薄く}書きすぎた。
c. コーヒーを{濃く/??薄く}淹れすぎた。
d. 色を{濃く/薄く}塗りすぎた。
e. 絵の具を{濃く/??薄く}つけすぎた。
f. ファンデーションを{濃く/??薄く}塗りすぎた。

{細かい/粗い}

(68) a. ナッツを{細かく/??粗く}砕きすぎた。
b. デッサンを{細かく/粗く}書きすぎた。
c. この先生は{細かく/??粗く}研究しすぎだ。

{強い/弱い}

(69) a. 綱を{強く/??弱く}引っ張りすぎた。
b. 相手の子を{強く/??弱く}叩きすぎた。
c. この曲のこの部分を{強く/弱く}弾きすぎた。

{長い/短い}

(70) a. グリップを{長く/短く}持ちすぎる。
b. ボールを{長く/??短く}キープしすぎる。
c. 髪の毛を{??長く/短く}切りすぎた。
d. 髪の毛を{長く/??短く}伸ばしすぎた。
e. 文章を{長く/??短く}書きすぎた。
f. 彼女に本を{長く/??短く}借りすぎた。

(63)〜(70)の例を見ると、{早い/遅い}以外でも、対になる形容詞ではその形容詞によって容認性に差が出ると言えそうだ。しかしこれらの例を見ると、その形容詞自体に原因があるのではなく、原因は動詞の方にあると考えられる。

例えば{早い/遅い}であれば「遅い」のほうが容認性は低い、というように片方の形容詞に偏ってその結果が表れやすいと思われたが、(70){長い/短い}の例を見てみるとそ

うではない。他の部分では「短い」が容認性が低くなりやすいと言えそうだが、(70c)だけは「長い」の方が容認性が低いのだ。これは(70c)の動詞「切りすぎる」という行為から「短い」という単語を連想させられるため、私たちが自然に「切りすぎる」のに髪の毛が「長い」のはおかしいと考えるからだと予想できる。同様に、同じ髪の毛の例であっても(70d)では「伸ばしすぎた」のに髪の毛が「短い」のはおかしいと考えるからだと予想できる。つまり考えられるのは、「形容詞連用形＋V-スギル」の文における容認性は形容詞自体に影響されるのではなく、そのあとに続く動詞に影響されるということである。

3.4.2. 分析・考察

対になる形容詞を使った文章で容認性に差が出る場合、形容詞自体ではなく「V-スギル」の動詞部分が影響していると考えられる。片方の形容詞の容認性が低くなっている文章は、どれも動詞から形容詞がイメージしやすいものばかりだからである。

本章では、本来形容詞を修飾しているはずの「-スギル」が動詞に直接結びついているというパターンの文型について考えてきた。ここであげた例文の「-スギル」はどれも本来は形容詞を修飾しているはずのものであるが、「買い-すぎる」「食べ-すぎる」のように、それだけで形容詞の意味まで兼ねてしまうような表現も含まれていることが分かるはずである。つまり、特定の形容詞が連想しやすい動詞に関しては容認性に差が出やすく、それ以外の中立的な動詞に関しては対になった形容詞のどちらをとっても容認されやすいのである。

4. まとめ

「動詞連用形+スギル」という形式の複合動詞は、付帯状況を示す「-テ」が後続する場合、文中における位置や、肯定形であるか否定形であるかなどの条件によって、文章の容認性が左右される。(15a)「??太郎は力を入れすぎて歯を磨く」のように、肯定形で文中に存在する場合の容認性は低いが、複合動詞部分を文末に移動することや、否定形にすることによってその容認性は高くなる。

また、形容詞の程度が甚だしいことを示す「～するのが-スギル」という文型のものには、条件によって、かかる位置を動詞部分に移動することが可能であるものが存在することが分かった。「-スギル」が修飾している形容詞が、動詞からすぐに連想されるものである場合は容認性にブレが生じるが、動詞が形容詞に左右されない中立的なものである場合、「-スギル」を動詞部分に移動しても容認できる。

参考文献

久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店
グループ・ジャマシイ編著(2003)『日本語文型辞典』くろしお出版
白川博之監修(2002)『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
新村出編(1994)『広辞苑第四版』岩波書店
飛田良文・浅田秀子(2002)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
森田良行(1993)『基礎日本語辞典』角川書店